



# ふくりゅう

特定非営利活動法人  
日本下水道文化研究会会報

発行責任者 酒井彰(運営委員会代表)

平成19年1月25日  
通巻50号

## ふくりゅう50号を祝う

日本上下水道設計株式会社 代表取締役会長  
西堀 清六(前評議員会代表)

日本下水道文化研究会は昭和61年(1986年)12月に設立されて満20年、限られた会員の皆様が地道であるが活発にご専門を駆使され、多岐にわたる下水道文化の調査研究、普及啓発活動を展開して大きな成果あげて今日に至っております。さらにこの素晴らしい業績を会員の方々だけでなく広く市民の方々に伝え、厳しいわが国の水環境を自分たちの問題としてとらえて、個人や社会と下水道との付き合い方の成熟を模索する活動を紙面に提供してお役に立ててきたのが「ふくりゅう」であります。

この「ふくりゅう」は平成7年6月1日に“日本下水道文化研究会”会報として創刊されましたが、その後「ふくりゅう」と名前をかえ運営委員会や事務

局の方々の献身的なご尽力で、次第に内容の充実した紙面になってきております。この根底には日本下水道文化研究会の会員の皆様が、水環境問題を幅広い視点で幅広い分野にわたってとらえて地道に活動されていることが強力なサポートとなっています。

このたび「ふくりゅう」が発刊以来12年の歳月のなかで50号の記念すべき節目を迎えるに当たり、私は日本下水道文化研究会が発立以来20年余の長きにわたり、会員の皆様のご熱心な活動に対し満腔の敬意を表すと共に、「ふくりゅう」が次の100号発刊に向け持続的・発展的な活動を続けられることを期待してお祝いの言葉といたします。

### 第38回定例研究会のお知らせ

## 国包章一氏「水道分野の国際協力をめぐって」

第38回定例研究会は国立保健医療科学院水道工学部長国包章一氏をお迎えして、下記の通り開催いたします。分野は異なりますが、本会も取り組んでいる海外技術協力がテーマです。人の生命に欠かせない飲料水の供給と生活の結果排泄される尿尿の管理を一体のものとして考え、「水供給と衛生」としての支援が今後求められていくと考えられています。このような認識から、是非多くの方に参加していただきたいと思ひます。

記

日時 平成19年3月2日(金)午後6時30分より

場所 日本水道会館会議室

講師 国包章一氏

国立保健医療科学院水道工学部長

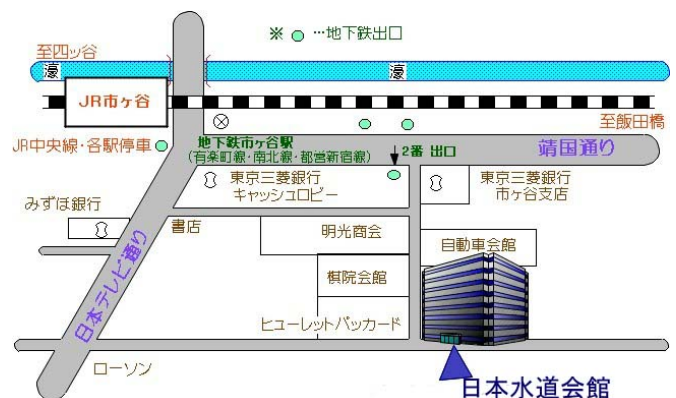
演題 「水道分野の国際協力をめぐって」

### 講演概要

衛生的で健康な生活を営むために水が重要であることは言うまでもない。開発途上国では、今日なお多くの人たちが水に恵まれない生活を送っている。このような状況を改善するために、これまでわが国は、主としてODAを通じて開発途上国の水道整備や水道分野の技術協力を行ってきた。今後は、限られた資源をより有効に活用しつつ、多様なアプローチによる国際協力の展開を図ることが求められている。開発途上国における自立可能な水供給システムの整備を支援するために、今何が一番必要かをこの機会を通して問い直してみたい。

### 講師紹介

東京大学都市工学科卒、昭和59年国立公衆衛生院衛生工学部施設計画室長、平成9年同水道工学部長(平成14年より国立保健医療科学院)、平成13年東京大学大学院工学系研究科附属水環境制御研究センター客員教授(併任)、平成元年から平成4年にかけて国際協力事業団派遣専門家(水道・環境衛生)としてインドネシアに滞在、著書に「新しい浄水技術」(編集委員長、技報堂出版)、「水道の病原微生物対策」(共著、丸善)などがある。



会場案内：千代田区九段南4-8-9

JR、東京メトロ市ヶ谷駅下車徒歩5分

連絡先： yarai\_sato@mue.biglobe.ne.jp または本会まで

## 本会会員 長谷川 清氏が旭日小綬章を受章

中村 隆一(本会会員)

本会会員の長谷川清氏(管清工業㈱会長)が、平成18年度秋の叙勲で、栄えある旭日小綬章を受章されました。永年、わが国の下水管路の維持管理業の向上に払われた努力を通して下水道の発展に寄与された功績に対して授与されたものですが、生粋の民間の下水道人が褒章でなく、勲章を受けるのは稀なことだそうです。

4年前の平成15年に、長谷川さんがこの下水文化研究会尿尿分科会で、「下水管路管理業への転身」と題して、ご自身の半生を語られたことがありました。その時のお話をもとに、長谷川さんの紹介をさせていただきます。

長谷川さんは、1925年に、米国のサンフランシスコに生まれましたが、気管支が弱かったため、一家を上げて南のロサンゼルスに引越し、少年時代をアメリカで過ごされました。しかし当時は大戦前夜で、排日気運が高く、10歳頃、一家は日本へ帰国します。

戦後、お父さんはGHQの関係で、下水道の維持管理機具の販売を手掛けられ、さらに下水道や排水管の清掃作業の会社を設立されました。長谷川さんご自身は早稲田大学政経学部を卒業され、乳業の会社に勤められていました。ところが1964年(昭和39年)にお父さんが不幸な事故で急死されました。「当時、私は胸をやられて、入院していたのですが、父が倒れた時間に、急に胸がものすごく痛くなって、そのあとスーッと楽になった。その日から病は急速に回復していったのです」と回想されています。

そして、父上の残された2つの会社を引き継ぐことになった長谷川さんは「私は文科系、下水道については何一つ知らない。四十の手習いの心境で…。」門を叩いたのが母校早稲田の理工学部。「聴講生として…」と申し込んだが、「机上の学問よりも、むしろ現場をよく見て

学ばれた方が…。それでわからないことがあれば、聴きにいらっしやい」と暖かな助言を下されたのが、遠藤教授だったそうです。

それからの長谷川さんは、排水管の清掃作業の先頭に立って、「汚水を頭から被ったことも何度もある」そうです。また、米国のダラスで下水管路のTVカメラをみて、いち早く国産機の開発を手掛け、欧米に先がけてカラー化するなど、いまでは当たり前になっている管路用のTVカメラの導入を積極的に行われました。また、3団体に分かれていた下水管路の維持管理業者を「下水管路維持管理業協会(現;日本下水道管路管理業協会)」に一本化し、さらに社団法人化するというリーダーシップも発揮され、会長職を10年にわたって務められた後、現在は同協会の名誉顧問をされています。



受章祝賀会で冬柴大臣と握手する長谷川清氏

## 人と業績—柿田富造氏の巻—

地田 修一(本会副代表)

元本会会員であり、郷土・常滑の地に生活基盤を保ちながら広い視野のもと、本業のタイル、土管の技術史はもとより郷土史の掘り起こしにも尽力されている柿田富造氏の人となりとその業績を、回顧録風に紹介します。

なお、本文執筆にあたっては、「常滑やきの調査・研究に捧げて—柿田富造氏—」(産業遺産研究第12号、2005/5)ならびに「土管の歴史展～飛鳥から現代まで～」(常滑市民俗資料館、平成6年)を参考にしました。

### 生立ち

常滑で400年くらい続いた農家の末っ子として、昭和2年に生まれました。小学校の同級生は、土地柄やはり焼物屋の子弟が多かったです。小学校を卒業した男子100名のうち30名ほどは地元にある5年制の常滑陶器学校に行き、10名ほどが旧制中学に進学しました。半分近くが中等

教育を受けるというのは、その頃では全国的にみても他に較べて倍くらいの率ではないでしょうか。

私は自転車で40分くらいの半田中学に入りました。得意な科目は数学でした。昭和20年に卒業しましたが、義兄に「名古屋工業専門学校(3年制)に窯業科ができたから入ったら」と言われ、窯業科の第1期生になりました。玉音放送は、常滑の伊奈製陶で聞きました。そこで勤労学徒をしていたのです。窯業科の専門科目には、陶磁器、ガラス、セメント、耐火物、鉋物などがありました。卒業後、1年間研究生として



柿田富造さん

鉾物の先生について偏光顕微鏡用の薄片を作ったり、専門分野の講義を聴講したりしました。

### INAXのエンジニアとして

昭和24年4月、地元の中学校の数学の先生になり、3年間勤めました。その後昭和27年に伊奈製陶に入社し、衛生陶器工場のトンネル窯の製図を担当しました。重油焚きのトンネル窯でした。昭和37年に内装タイル工場に焼成課長として転任しました。ここでも重油焚きのトンネル窯の設計に携わりました。衛生陶器は、非水洗便器から水洗洋風便器へと代り、さらに自動温水洗浄便器へと発展しました。最近では抗菌性釉薬も開発されています。研究開発部長代理のとき浄化槽の開発に関わり成功しました。浄化槽の量産体制が整備され水処理事業部ができましたが、私が初代の部長になりました。

日本は高度成長期に入り公共建物・住宅の建設ラッシュになり、伊奈製陶も建築資材を生産していたことから発展できたわけです。私が入社した時は従業員が800人でしたが、現在では7,000人だと聞いています。

### 窯のある広場・資料館館長と執筆活動

役員（常務）を退任する昭和63年に、社長から「タイルの技術が忘れられていくので、書いてくれないか」との命があり、タイルの技術史をまとめることになりました。と同時に専務からは「INAXが立ち上げた窯のある広場・資料館の初代館長になってくれないか」との打診がありました。結局こちらを受けて、並行して二つの仕事を進めることになりました。国会図書館にもよく行きましたが、館長の名刺があったので資料が集め易かったです。

### 著作など

- ①「日本のタイル工業史」：ライバルのタイル会社に気を使って記述しました。
- ②「常滑の陶業百年」：常滑市の民俗資料館の学芸員は古代と近世が専門で、私が近代以降についての論文を発表していた関係で依頼がきたのだと思います。
- ③「とこなめ歴史発見」：地元の常滑ケーブルテレビの台本の原作を24ほど作りました。
- ④趣味は音楽：音楽は子どもの頃から好きで隣の家でオルガンがあったので、しょっちゅう弾きにいきました。今でも、好きな音楽がテレビから流れてくると、それを譜面に書いてピアノで弾いています。吹奏楽の曲も作ったことがあります。最近では、パソコンミュージックもやっています。
- ⑤「わが国の土管のあゆみ」：常滑に関する部分を抜書します。

『明治初年には、常滑では水門（すいも）と呼ばれた伝統的な素焼によるソケット付土管が造られていた。明治4年（1871）に神奈川県はお雇い外国人 R. H. ブラントンに依頼して、横浜新埋立居留地の計画に入った。そして、翌年常滑の鯉江方寿に「真焼水甕のように極めて堅牢に焼成してもらいたい」と下水道土管を依頼してきた。方寿は、早速同年中に真焼土管（よく焼き絞めた）を製造して納入したが、ブラントンは仕様と違うという理由で全数不合格にした。そのため方寿は製造工程のすべてにわたって幾多の改良を加え、特に木型による新成形法を考案して苦勞の末、ようやく翌年納入することが出来た。これが常滑にお

ける近代土管のはじめである。

その後、明治10年に京都―大阪間の鉄道が開通するが、建設にあたり鉄道寮（明治10年より鉄道局）は明治7年に全国より鉄道路管の公募を行った。ところが常滑の方寿の土管の品質が、他を圧倒して抜群の成績であったので、それ以後の鉄道路管は常滑の方寿が受注することになった。この成果は、常滑土管を一躍有名にし、これを契機として常滑の土管産業は他の生産地を引き離し、大きく発展する原動力となったのである。

明治34年に両面焚倒焰式角窯が誕生した。この窯は、当時常滑町立陶器学校長だった横井惣太郎が設計した。この窯の燃料は、すべて石炭で従来の登窯の燃料費の60%で焚けるし、品質は均一になるので組合員の注目を浴びた。この窯は逐次普及して行き、昭和4年には54基になって容積も次第に大きくなる傾向を示した。

食塩釉駆けは、1200度以上の高温で焼成しなければならないので、常滑で利用する業者はあまりなかったのだが、マンガン釉に食塩釉掛けをすれば、マンガン釉単独の場合よりもさらに低温で艶が出るので、この方法で焼成した業者はすこぶる多かった。常滑で本格的に食塩釉掛けが陶管（土管）に施されるようになったのは大正11年以降である。

明治7年以後は、鉄道路管や公共下水道土管は、常滑産でなければならないほどの世評のもとに発展していくが、全国各地で土管を生産していた業者にしてみれば、地元を通る鉄道や地元の公共下水道に、地元土管を使うのは当然だとばかりに運動を起こす。しかし、そのためには常滑方式の土管製造技術を修得する必要に迫られて、常滑から職人を迎えたり、常滑の機械や窯を購入したりして、地元土管業者は品質向上に努力した。

戦前の陶管製造大手であった伊奈製陶（株）は、戦後、陶管の生産を復活させずに衛生陶器の生産に転換し、タイルとの二本柱で復興に励んだ。

常滑産業の原点ともいえる土管という管材は、日の目を見ない地下に埋設される運命にあるが、その歴史もまた長い間日の目を見なかった。それを今回ようやく木漏れ日が射す程度にまでまとめることができたが、まだ緒についたばかりの実感をぬぐい去ることはできない。』



常滑で製造された土管  
（窯のある広場・資料館ホームページより）

### 後輩へひと言

古文書の文献をみますと、同一の歴史でも作者によっては異なる事柄が書かれていることも多数あるはずですから多数の文献を調べて信憑性のある文献を探さなければならぬと思います。後世の方にも文献を整理・列挙して、調べやすくすることも大切なことだと思います。

（昨年10月28～29日に尿尿・下水研究会が実施した「やきものの町・常滑を訪ねて」の企画の際、柿田さんには現地をたいへんお世話になりました。ここに、改めてお礼申し上げます。）

## 下水文化叢書『江戸下水の町触集』を読んで

山野 寿男(本会会員)

## この人ありて

221年間にわたる「江戸町触集」17,842件の中から下水に関するもの157件を採集するだけでも大変な作業であるのに、これに「読み下し文と註」を整えて江戸下水に関する町触を集大成されたことは「栗田さんありて」はじめて実現できたことです。その上、学識にじみ出る綿密な「ひと言」を綴られて江戸下水を案内していただけるのはありがたく、また、その文中の随所にお人柄がにじみ出ていて、誠に味わい深い叢書となった。

## 下水道管理の原点

町触の中でもっとも早いのが正保5年(慶安元年、1648)のもので、ここにはすでに「下水浚えと下水へごみ芥を捨てるな(1)」(カッコ内は目次の通し番号、以下同じ)という下水道管理の基本が出ている。まず「下水浚え」はリスト表(117ページ)にもあるように、それ以後もしばしば触れ出された。大坂(近世の大阪市の意)でいうと毎年4月15日に出された「水道浚え」である。つぎは「ごみ芥を御堀、町屋の入堀、表裏の大下水、空き会所に捨てるな(19、30)」と具体的に例示されている。大坂ではすべて「川筋掟」のなかで扱われた。

「下水改め(2)」は奉行所の「下水御改役(48)」によって下水の管理状態が点検されたことであり、この町触も以後しばしば出されている。これは武士の町・江戸ならでのことであり、町人の町・大坂ではこの種の町触はほとんどない。次に下水普請の入札に関する町触が多数みられ、そこから「新下水の工事費は間口割りで負担(76)」、「上水道投げ渡し樋や上水樋柵の修復費は町々か組合で負担(50、125)」などが分かり、また、幕府の都合で町内の下水吐口が塞がれた代わりに新たに作られた下水の費用をどちらが持つのか(106)といったものもあり、関心をひくところだ。なお、下水を管理するための組合には3つの形態(町方のみ、町方と武家方、武家方のみ)があり(258ページ)、とりわけ普請に要する「入用出銀割合の類例調べ(131)」というのは現代風であって大坂では類例をみない。

## 江戸と大坂の違い

江戸では「下水改め」と「普請の入札」に関する町触が頻繁に出されているが大坂ではそれほど多くはない。しかし、なんといっても江戸と大坂の大きな違いは上水の有無にある。大坂には上水はなく、その用語すらないのに対し(下水は水道と呼ばれた)、江戸では町中に上水と下水が

共存しており、そのため、「上水の上、下水渡し戸樋(39)」、「下水吐けの上を通る上水投渡樋(50)」、「大下水の上渡樋(神田上水の樋)(73)」などの独特の構造と表現が見られる。

また、家の庇と雨落溝の関係は「庇下、京坂は屋外なり、江戸は屋内なり」(近世風俗志)といわれるように京坂と江戸では違っていた。江戸では「下水内一間の庇下につき三尺は自分地面、三尺は公儀地(119)」であり、そこは誰でも自由に通行できる空間であった。しかし、山王御祭礼神輿の道筋では「棧敷を雨落溝より外へ出すな(157)(\*これが最後の町触)」と公儀地を占拠することが禁じられている。

## 町触集の用語

かつて、近世の下水道に関する用語を調べたことがあった。きっかけは大坂に、なぜ下水や下水道という用語が出てこないのか、なぜ下水のことを水道といったのか、ということから始まった。

この「町触集」には江戸で使われた下水道用語が随所に出てくる。「下水と溝(1ほか多数)」、「大下水と小下水(7ほか多数)」、「御公儀大下水(104)」、「下水奉行(21)」などであり、また「下水道リスト(101ページ)」もあり、それに大坂と同じように下水を「水道(38)」といった例も出ている。道路の両側にある「雨落下水(10ほか多数)」のことを「家前下水(107)、家前雨落下水(110)、往来雨落下水(115)」ともいい、いかにも表現が豊かである。そのほかに「下水樋(49)、下水戸樋(35)、町境大下水(118)、往還跨下水(116)、下水橋(56)、下水石橋(31)、下水板橋(123)」などバラエティに富み、大坂ではお目にかかれぬ表現に出くわす。

## 下水文化の宝庫

江戸の下水文化について、本書のように編年史的にまとめられ体系づけられたものは現在までなく、また、これからも出そうにない。東京の下水道人多しといえども江戸下水の文書をここまで読み解ける人は誕生しそうにないからだ。本書は、まさに下水文化を探る宝庫ともいえるべきものである。

下水文化に関心をもつ者は、著者の13年間にわたる取組みと労苦を肝に銘じて、すべからく本書を拝読すべきである。さて、この小文のタイトルは「町触集を読んで」とあるが正しくは「拾い読みだけして」ということであり、これから味読することはいうまでもない。

## 屎尿・下水研究会2007年度の予定

屎尿・下水研究会2007年度の予定が以下のように決まりました。

- 6月 酒井彰氏「海外でトイレを建設する」
- 9月 トイレに関する手作りビデオの放映会：大友氏提供ビデオ2本及び常滑の講演ビデオを放映予定
- 12月 栗田彰氏「江戸の町触れ」

- 2008年3月 稲場紀久雄氏「明治33年下水道法制定の経緯」

- 2008年9月 小峰氏(葛飾区郷土と天文の博物館)「生活改善とトイレ・下水」

研究成果を発表される方はご連絡下さい。上記の予定外に日程を設定したいと思います。

改めて、屎尿・下水研究会をよろしく願います。ことしも素晴らしい会にしましょう。(石井明男)

## 『水は恋人』中国版完成まで 甘 長准(本会運営委員)

水道界で話題を呼んでいる「水は恋人」は、本会会員と  
なられている厚生労働省健康局山村尊房水道課長が27年  
前に同郷の先輩である廃棄物研究財団杉戸大作理事長(本  
会評議員)の同名著書に発表された詩に自作の曲を付けた  
歌である。歌詞は次のとおりである。

「水は恋人」  
あこがれ多き水源(みなもと)に  
ひとりたたずむ朝ぼらけ  
そっとささやくせせらぎに  
いつか芽生えし恋心  
残月淡く山百合の  
流れに露のひとしづく  
やさしき君の思いでは  
甘く切なくはてしなく  
雨か嵐か降る雪か  
明日の定めは知らねども  
水に捧げし我が命  
男の涙誰か知る

私が「水は恋人」中国語版作成のプロジェクトに参加した  
きっかけは、2005年10月のある日に山村尊房さんから  
もらった一通のメールであった。国際交流のために、「水は恋  
人」の歌詞をいくつかの言語で紹介したい、中国版もできたら  
とのお話であった。「水は恋人」—このロマンチックなタイ  
トルに関心を強く引き付けられた私は、水道産業新聞社  
のホームページの水の音楽館のサイトから「水は恋人」の歌  
詞を読み、曲の演奏を聴いた。そして、この境地が高く意味  
が深い詩と詩に合った素晴らしいメロディーにたいへん感  
銘をうけ、すぐに中国版の作成役を買って出た。

翻訳の初案はメールをもらった当日にも出来たが、山村  
さんから詩の意味を講釈してもらってから、また数日をか  
けて詩の中訳文を繰り返して推敲した、さらに、中国語の  
文句に磨きを掛けるために、北京にいる漢詩の得意な中国  
の水道人であった父親と、カナダに在住している北京大学  
中国文学専攻であった従姉に意見を聞くようにした。二人  
からは幾つかのアドバイス、及び父親からは「水道人の心  
が共通です。本当に感動しました」、従姉からは「水道業  
界の人ではなくても、素晴らしい詩の境地を感じます。詩  
の真意をよく翻訳できていると思います」とのメッセージ  
をもらった。自信がついた私は修正した「水は恋人」の詩  
とする中訳文を山村さんに渡した。その後、この訳文は「水  
は恋人」の歌詞紹介として、水道産業新聞社、日本テレビ  
「中日水務情報」2006年冬号 Vol.5 に掲載された。

次の目標は中国語で歌うことである。まず歌いやすいよ

うに詩に文字数を増やしたりして歌詞とする中訳文を作  
成し、そして、曲に合わせて繰り返して歌ってみた。音楽  
の苦手な私にとっては大変な作業であった。一方、山村さ  
んは中国語の勉強を着々と進めておられ、私が作成した  
「水は恋人」中国語版の録音を聞きながら、歌い方を最終  
にアレンジされた。そして、ついに去年の11月23日に横  
浜市で行われた「第7回水道技術国際シンポジウム」の特  
別セッション：「2006日中水処理技術交流会」の意見交換  
会(懇親会)で、中国語版「水は恋人」が披露された。山  
村さんの熱唱は会場を盛り上げ、中国側出席者の高い評価  
をもらった。この一曲、中国語の「水は恋人」は中国側出  
席者の心を温める“スピリッツ”になったのである。

詩とする中訳文	歌詞とする中訳文
水恋人 在这憧憬的源头 独伫于黎明之际 对那轻声细语的小溪 不觉萌发爱意 淡淡残月天香百合 流动一露滴 对温柔的你的回忆 是永恒、苦恼和甜蜜 是风、是雨、是雪 明日命运迷离 愿以生命相许 莫道男子汉之泣	水恋人 在这憧憬的源头 一个人独伫于黎明之际 对那轻声细语的潺潺小溪 不知不觉萌发了我的爱意 淡淡的残月天香百合 花瓣上流动着一颗露滴 对温柔的你的深深回忆 是永恒、是苦恼和甜蜜 是风、是雨、还是雪 明天的命运虽不知晓 愿把我的生命献给你 莫道男子汉之泣



「2006日中水処理技術交流会」意見交換会で中国語で  
「水は恋人」を熱唱する山村尊房水道課長

(写真は(財)水道技術研究センター林野氏提供)

## バルトン生誕150年 記念誌を出版しました

昨年2006年は、「わが国衛生工学(上下水道)の始祖」  
といわれるW.K.バルトンの生誕150年に当たりました。

そのため、バルトンの業績を日本国内だけでなく、彼の  
母国であるスコットランドでも顕彰する事業を行おうと  
衛生工学、上下水道界からの声が起こり、東京大学名誉教授

の藤田賢二先生を委員長に記念事業企画実行委員会が組  
織されました。そして5月には東京都庭園美術館で記念講  
演会が実施され、日本の上下水道界の関係者約250人が参  
加しました。そして9月には、小林康彦氏を団長に11人の  
代表団をスコットランドへ派遣し、アバディーン、エディ

ンバラ両市で、故国で無名であったバルトンを顕彰する記念行事および記念碑の除幕式を挙行し、列席した地元名士に深い感銘を与えることに成功しました。これらの行事には、バルトンの玄孫で音楽家のケビン・メッツ氏が出演して、津軽三味線による妙技を披露し、出席者の感動を呼んだことも報告させていただきます。

このたび発行されました「バルトン生誕 150 年記念」誌は、この一連の行事を講演を中心に発表された論文（日本語、英文）、写真をまとめて掲載しました。

内容は▽発行のこぼ・ご挨拶▽記念講演会（東京）▽バルトンの生涯・年表▽スコットランド訪問（アバディーン市およびエディンバラ市での行事）▽追記となっております。この記念誌はバルトン研究の貴重な資料となるものと自負しております。（A4判、ハードカバー120頁）

記念誌は、非売品で記念事業に賛同下さり、協賛金を拠出して下さった個人 366 人、企業・公益法人 60 団体に配布しました。

（本会会員 中村隆一）

### イオン環境財団平成19年度助成内定

地球環境基金の助成を受けて3年間バングラデシュで衛生改善活動をしてきましたが、同基金では同一テーマに対して、3年が助成期間の限度であるため、活動を継続するため、いくつかの財団、基金に交付の応募をしてまいりましたが、このたびイオン環境財団より助成の内定をいただきました。6年前の世界湖沼会議に併せて開催した研究発表会について2回目の助成です。

同財団の助成テーマは「生態系の保全」ということですが、バングラデシュのような農業を主産業とし、しかも人口が多い国では人間の尿尿と農地に施用する肥料が水系生態系を脅かす主な要因であり、その保全のために、衛生的かつ環境負荷低減を意図した尿尿の農地還元

は有効であるという主張が受け入れられました。申請書には活動目的を以下のように書きました。

「バングラデシュ農村域では生活系（とくに尿尿）、農業系の汚染が生活環境、飲料水源、自然生態系に影響を及ぼしている。これらの汚染源を削減し、生活環境の改善、バイオマスであるし尿資源の有効利用による土壌環境の改善を目的として、エコロジカルサニテーションを自立的に導入する事業を支援する活動を行う」

地球環境基金の活動期間では、2年目に建設したトイレから生産できる乾燥便の効果については把握できませんので、この点をフォローならびに調査することに充てたいと考えています。助成期間は2007年4月から1年間、助成額は1,500千円です。

### バングラデシュ・エコトイレ普及活動便り

バングラデシュでは選挙管理内閣の監視下、道路封鎖などさまざまなトラブルが続いていましたが、ここに来てようやく平静を取り戻したようです。私たちも昨年8月以来訪問しておらず、約半年も間があいたのはプロジェクト開始以来初めてのことで。

前にお知らせしておりました土木学会環境工学委員会のスタディツアーは、学生が参加するものであり、治安への懸念から中止されました。来年も計画されるとのことで

すのでご期待ください。

上記のイオン環境財団よりの助成をいただけることになりましたが、地球環境基金にもテーマをトイレだけから安全な飲み水とごみを含めて「捨てない」技術によって、地域資源として生かしながら、生活環境の改善を図る目的の活動を提案し、申請いたします。採択された場合には、より多くの会員お方からのご協力が必要となりますので、情報提供、さらには活動への参加をお願いいたします。

### 運営委員会・事務局より

- 新しい年を迎えました。今年は開発の年にあたり、4年ぶり東京で開催です。タイムリーな企画を考えていきたいと思いますが、論文発表を含めてご協力をお願いします。
- 巻頭に西堀前評議員会代表からお祝いのお言葉をいただきましたが、本号でふくりゅうは50号を迎えました。足掛け12年間で年平均4回強の発行をしてきたこととなります。今後はより広く会員の方からの投稿を掲載していきたいと思っております。また、ふくりゅうのこれまでのあゆみは、ホームページを管理していただいている小松建司さんのご尽力で、50号すべてがホームページでご覧いただけるようになっていますので、お目通しいただければ幸いです。
- 先号でも督促させていただきましたが、約70名の会員からの会費が未納になっております。至急の納入をお願いいたします。
- 平成19年度の総会、例年通り5月下旬開催し、活動状況についてご報告します。

編集後記 ふくりゅうの50号を発行することができました。会員の皆様の情報交流の場としての役割が十分果たしているのか、気がかりではありますが、継続することこそ意味があると思いますので、100号、200号を目指していきたいと思っております。50号発行にあたり、一度これまでを振り返ってみたいと思いつつ、あいにく果たせませんでした。会員の皆様も改めて思い返すことなどありましたら、是非お寄せいただきたいと思います。（酒井 彰）

「ふくりゅう」では、原稿募集をしております。「水」について思うこと、身近な話題、会に対するご意見やご提案、どのようなことでも結構ですから事務局までお送りください。

### ふくりゅう 通巻50号おもな目次

ふくりゅう50号を祝う	1
第38回定例研究会のお知らせ	1
長谷川清氏 旭日小経章を受章	2
人と業績：柿田富造氏	2
『江戸下水の町触集』を読んで	4
『水は恋人』中国版完成まで	5
バルトン生誕150年記念誌発行	5

### 特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

〒162-0067 新宿区富久町6-5 NJS富久ビル別館3F  
TEL & FAX 03-5363-1129 e-mail: jade@jca.apc.org

### ホームページもご覧ください

<http://www.jca.apc.org/jade/index.htm>

関西支部 <http://www1.kcn.ne.jp/~k-atsumi/>